「宇治十帖」中君の時間

――宇治から都の論理へ――

堀江　マサ子

はじめに

匂宮が宇治の時空へ本格的に侵入してきたのは、中君との結婚日「二十八日の彼岸のはて」であった。三日間、匂宮は通い続け、次の匂宮来訪は「九月十日のほど」となる。最初は十日間であった夜離れが、三ヶ月に及ぼうとしている。義姉の死を聞いても、宇治に匂宮は来ることができない。匂宮の置かれている位置が、月日の表記によって分かる。最愛の姉の死に、夫が来ない中君の苦悩の深さが浮き彫りにされる時の表し方である。都の論理と宇治の論理のずれを、月日の記述が語っている。

四十九日の喪がまだあけない十二月の雪の降りしきる夜にやっと匂宮は弔問するが、中君は会わない。その描写は、次の通りである。

御忌は日数残りたりけれど、心もとなく思しわびて、夜一夜雪にまどはされてぞおはしましける。日ごろのつらさも紛れぬべきほどなれど、対面したまふべき心地もせず、

（「総角」⑤335）

長い間、宇治に来ることができなかった匂宮の、「夜一夜雪にまどはされて」の訪問である。「まだ夜深きほど」そして、「雪のけはひいと寒げなるほど」であったから、中君は「日ごろのつらさも紛れぬべきほど」であった。しかも「濡れ濡れ」の匂宮である。女の官能に迫るものがあったはずであろう。それでも、中君は会わない。

二人は、「物越しにて」会う。この時、匂宮は「雪を冒して来た」とは言わない。「日ごろの怠り尽きせずのたまふ」のである。あくまで優雅な対応である。「千々の社をひきかけて、行く先長きことを契りきこえたまふ」匂宮である。それに対して中君は、その饒舌に「心憂けれど」であったが、ともすれば崩れそうになる心を抑えてほのかに歌を詠む。

来し方を思ひいづるもはかなきを行く末かけてなにたのむらん

この歌には、匂宮との苦悩の「来し方」を思い出し、これからの「行く末」をどうしてあてにできようか、との現在のやり場のない心が詠まれている。自分の匂宮との過去、現在、未来の時間への懐疑を素直に訴えている。この心は匂宮には届かなかったようである。匂宮の返歌「行く末をみじかきものと思ひなば目のまへにだにそむかざらなん」を聞き、中君は「心地もなやましくなむ」と言って奥に入ってしまう。来し方を思い、行く末を考える中君と現在のみを考える匂宮が簾越しに向かい合っている。

中君は大君のように直線的ではない[1]、しなやかでしかも芯の強い女性である。その中君の生の軌跡が時間という軸にどう表れている

か、考えたい。

一、大君と「もろともに」の時間

宇治における中君は、どんな時間を過ごしていたのだろうか。大君存命中は、いつも一緒に時を過ごしていた。それは、「もろともに」の時間として表現されている。宇治の人々の「つれづれ」の時間[2]の中で、中君は大君と「もろともに」の時間を過ごしていたことが分かる。月を見るのも琴を弾くのも、いつも一緒であった。その例を、次に掲げる。

①暗くなりぬる紛れに起きたまひて［もろともに］結びなどしたまふ。（「総角」⑤２４２）

②中の宮も、あいなくいとほしき御気色かなと見たてまつりたまひて、［もろともに］例のやうに御殿籠りぬ。（「総角」⑤２５０）

③いかにするわざぞと胸つぶれて、［もろともに］隠れなばやと思へど、さもえたち返らで、わななくわななく見たまへば、（「総角」⑤２５２）

①は、八の宮一周忌のための心葉を一緒に作る場面、②は、二人一緒に眠る場面である。ここでは、「例のやうに」と形容されているから、いつも一緒に眠っていることが分かる。この表現から、中君は大君と「もろともに」の時間を過ごしていた。③は、薫の侵入に、大君が逃げる場面である。「もろともに隠れ」たい心を抑えて、大君のみ逃れるのである。「もろともに」の時間が、この時から明らかに崩れてくる。仲の良い姉妹の「もろともに」の時間は、男の侵入によって崩れていく時間でもあった。

しかもよく見ると、どの「もろともに」と表現されている時間も、二人の「もろともに」の時間が崩れていく前触れとして描かれている。①は、薫の移り香に「もしかして姉は」との疑惑を抱えて二人で心葉を結ぶ「もろともに」の時間である。②の「もろともに」は、薫が来ることが分かっていて、大君は薫と妹を結婚させようとし、その心を隠して「もろともに」眠る時間である。③は実際薫が侵入してきたから、大君が逃げる時の心として「もろともに」逃げたいと思う心である。しかし、実際逃げることは不可能な状態であった。姉妹の充実した時間描写には「もろともに」の言葉を用いた表現はない。「もろともに」の表現は、「もろともに」の時間に危機が迫った時、危機的心情を覆い隠す形容として使われている。中君と大君の宇治での時間の基調が「もろともに」であっただけに、他者の侵入により壊されそうになってもけなげに「もろともに」の姿勢を保とうとする時間表現が「もろともに」の時間であった。「もろともに」の時間が崩れかかっている時に、形として「もろともに」の状態が顕在化している。[3]

宇治十帖の「もろともに」の用例は、十一例あり、中君と大君に三例、中君と匂宮、大君と薫、匂宮と浮舟に二例ずつ、薫と匂宮、右近と女房に一例ずつ使われている。中君と大君の場合はその危機に、二つの恋の場面はその始まりに使われている。大君と薫は、「空のあはれなるをもろともに見たまふ。（「総角」⑤２３７）」、中君と匂宮は、「もろともに誘ひ出でて見たまへば（「総角」⑤２８２）」と時間を共有することになるが、中君は、ゆったりと流れる大君との「もろともに」の時間の共有から次第に遠ざかっていくことになる。[4]男君との時間の共有が始まると、姉妹の「もろともに」の時間

は崩れていく。それは、生と死という位相に二人を引き裂いていく前触れともなる二人の「もろともに」の時間であった。

しかし、「もろともに」生きた記憶は、大君死後も中君の中で生き続ける。「行きかふ時々に従ひ、花鳥の色をも音をも、同じ心に起き臥し見つつ（「早蕨」⑤345）」と、中君は記憶をたどることになる。

二、桜の時間

表面は繕っていたが内面は崩れそうであった「もろともに」の時間は、姉の死によりなくなり、中君は一人宇治に残されてしまう。その中君を、匂宮は二条院へ引き取ることにした。その日が、二月七日である。

この日が引越日に選ばれたのは、梅から桜の花の女君へと変遷しようとして空転していく中君の時間を表わすためである。そして、月が出ていることが、物語の必須の条件である。なお、二月七日の日付は、『源氏物語』中、この箇所だけである。[5] 一月は、宮中行事が目白押しであるから、それが暇になった二月が引越日に選ばれたのは頷ける。なぜ七日でなければならないか。まず、引越の山越えの場面を、次に掲げる。

道のほど遥けくはげしき山道のありさまを見たまふにぞ、つらきにのみ思ひなされし人の御仲の通ひを、ことわりの絶え間なりけりと、すこし思し知られける。七日の月のさやかにさし出でたる影をかしく霞みたるを見たまひつつ、いと遠きに、ならはず苦しければ、うちながめられて、

ながむれば山より出でて行く月も世にすみわびて山にこそ入れ

さま変りて、つひにいかならむとのみ、あやふく行く末うしろめたきに、年ごろ何ごとをか思ひけんとぞ、とり返さまほしきや。（「早蕨」⑤363、364）

午後十一時三十分ごろ出る七日の月は、「ながむれば」の独詠歌の「いずれ山里に帰ってくるかもしれない」との不安を詠むために、必要であったのではないか。ちょうど木幡山を超えている時に月の出がないと、歌の契機となるものがなくなる。七日の月の出を見ることによって、月の入りを予見する中君を描くために、七日の月の出は必要である。「さやかに」照らす七日の月は、宇治から京へ移転していく中君を照らすことによって、月の入りを予見させ、宇治に帰ってくるかもしれない不安をかき立てている。木幡山を越えつつ「行く末」のうしろめたさを思惟する中君である。この不安を表すために二月七日の月の出は必須のものであった。

そして引越の二月七日という日は、宇治から京への転換点としての、中君の日付表現である。この日を境として、中君は京の女君になっていく。二月七日に中君を二条院へ迎えたのは、二十日あまりに夕霧の六の君の裳着が控えていたからかもしれない。結局、中君の二条院入りにより、この月の結婚は見送りとなる。

引越の前日、薫と中君は宇治の邸で梅の花との別れを歌の贈答によってしている。京へ移ってから、「花盛りのほど、二条院の桜（「早蕨」⑤367）」と、京の二条院は桜の真っ盛りとなる。中君は、「梅の花の人」から「二条院の桜の女君」に変わるかに見えた。呼称の変遷を見ると、中君が二条院に迎えられてからは、「対の御方（「早

蕨」⑤３６７）」「二条院の対の御方（「宿木」⑤３８３）」と呼ばれている。この呼称変遷は、時間軸の変遷をも表している。そこには、二条院の女君への時間転換がある。しかし、桜の花とともに中君の様子が描かれることはない。河添房江氏は、「源氏・寝覚の花の喩」で、女君の花の喩を分析し、「宇治十帖」については、次のように述べている。[6]

ところで六条院世界において、その核に女君の主題的位相をも封じこめていた花の直喩は、第三部にいたるとその多価性をうしない、類型的なものに堕していく。（略）花の直喩の表現法としての充実は、第三部世界では遠く手放されて、その展開の可能性の環もまた閉じられたといえるだろう。

中君は二条院の女君にはなったが、桜の女君にはなりえない。それに反して、匂宮は、桜と関係の深い宮であった。八の宮邸への訪れも、「はるばると霞みわたれる空に、散る桜あれば今開けそむるなどいろいろ見わたさるるに（「椎本」⑤１７２）」と、桜の中でのことである。そして、匂宮は、「おもしろき花の枝を」折り、「山桜にほふあたりにたづねきておなじかざしを折りてけるかな（「椎本」⑤１７４、１７５）」と歌を贈る。この返歌は、「かざしをる花のたよりに山がつの垣根を過ぎぬ春の旅人（「椎本」⑤１７５）」と、中君がしている。桜の取り持つ縁を予感させる歌の贈答である。そして、一年後、匂宮はこの桜を思い出し、中君と次のような歌の贈答をしている。

つてに見し宿の桜をこの春はかすみへだてず折りてかざさむ
（「椎本」⑤２１４）

いづくとかたづねて折らむ墨染にかすみこめたる宿の桜を
（「椎本」⑤２１４）

この歌の贈答は、二人の物語の幕開けの予告である。桜が咲き、一年が経過したことを語り、匂宮と中君の物語が展開していく。

また、二条院の桜は、浮舟の母、浮舟、薫側からも描かれている。浮舟の母は、「いときよらに、桜を折りたるさましたまひて（「東屋」⑥４２）」の匂宮の姿を見ている。浮舟には、「紫の薄様にて桜につけたる文（「浮舟」⑥１７３）」と二条院の桜につけた文が贈られてきている。二条院の桜は、匂宮に付与された桜なのであった。

その二条院の女君に、中君は、二月七日を起点としてなり、皇子を生み、桜のもとで過ごす存在に変わっていく。「幸ひ人」[7]としての時間を生きたことは窺えるが、桜とともに描かれることは決してなく、女君としての苦悩が記されているだけである。

一方、薫は、二条院の桜の盛りに訪れている。

花盛りのほど、二条院の桜を見やりたまふに、主なき宿のまづ思ひやられたまへば
（「早蕨」⑤３６７）

薫は、新築の三条宮から二条院の桜を望み見て、宇治の邸の桜とだぶらせている。三条宮から二条院の桜を望み見るだけの薫と、二条院の女君の中君に桜は喩えられない二つの空洞化が描かれている。桜という記号の空転がここにはある。桜のモチーフを散りばめているが、桜とともには描かれない中君の不安定な位置づけがなされている。二条院の桜として外側から見られる中君、決して桜に喩えられない中君は、二条院の桜を継ぐ存在にはなりえないことが暗示されている。しかし、その中君は出産によって、正編の花に喩えられた女君たちの存在を超えていく。

宇治から京への引越日、二月七日は、今まで都側のみ記されてい

た日付表現が中君側からも明記されるようになった最初である。これは、中君が引越日に住処を移動しただけではなく、都側の人となったことをも表している。この日付が物語の分岐点をなしている。日付が物語の中に刻まれることによって、個人的な日付が社会的段階のものになっていく。

三、出産への時間

二条院へ迎えられた中君の時間の中で、出産への時間、そして、その後の産養の時間は、特筆すべきものである。その時間があったからこそ、記号の空転として描かれていた中君の桜の時間が、実を伴ったものとなってくる。最初の懐妊の兆候は、次のように語られる。

さるは、この五月ばかりより、例ならぬさまになやましくしたまふこと もありけり。こちたく苦しがりなどはしたまはねど、常よりもものまゐることいとどなく、臥してのみおはするを、（「宿木」⑤385）

中君の懐妊の時間軸の始まりである。その悩みは、次のように記されている。

・「さらば、心地もなやましく のみはべるを、また、よろしく思ひたまへられんほどに、何ごとも」（「宿木」⑤426）

・「うけたまはりぬ。いとなやましくて、え聞こえさせず」（「宿木」⑤431）

・「いとなやましきほど にてなん、え聞こえさせぬ」（「宿木」⑤444）

・「胸なん痛き。しばしおさへて」（「宿木」⑤445）

・「胸はいつともなくかくこそははべれ。昔の人もさこそはものしたまひしか。長かるまじき人のするわざとか、人も言ひはべるめる」（「宿木」⑤446）

そして、中君の懐妊は、薫の接近をも食い止めている。それは、中君の懐妊の「腰のしるし」であった。薫の自制は人間の性の根源的なものへの畏れからだったのかもしれない。

中君の出産は、薫の権大納言兼右大将になった六条院での饗宴、女二の宮との結婚と重ねられつつ描かれている。その関わり合いを表にすると、左のようになる。

傍点は日付表現、傍線は出来事、〈　〉は記事の概要、波線は薫の心のポイントを示す。

日付	中君の出産関係の出来事	薫側の出来事
正月晦日	〈中君陣痛・諸方より見舞い〉 正月晦日方より、例ならぬさまになやみたまふを、（略）このをりぞ、いづこにもいづこにも聞こしめしおどろきて、御とぶらひども聞こえたまひける。	〈女二の宮裳着〉 中納言の君は、宮の思しさわぐに劣らず、いかにおはせんと嘆きて、心苦しくうしろめたく思さるれど、限りある御とぶらひばかりこそあれ、あまりもえ参でたまはで、忍びてぞ御祈祷などもせさせたまひける。さるは、女二の宮の御裳着、ただこのころになりて、世の中響き営みののしる。（略）男方も心づかひしたまふころなれど、例のことなれば、そなたざまには心も入らで、この御事のみいとほしく嘆かる。

二月の朔日	〈中君の出産〉 いと苦しくしたまへば、こなたにおはしますほどなりければ、僧などさぶらひて便なき方にとおどろきたまひて、（略）請じたてまつりたまふを、なやみたまふ人によりてぞ思したゆたひたまふめる。（略） からうじて、その暁に、男にて生されたまへるを、宮もいとかひありてうれしく思したり。 かく籠りおはしませば、参りたまはぬ人なし。 〈「御産養」「五日の夜」「七日の夜」「九日」の盛大な祝い〉	〈薫の昇進〉 二月の朔日ごろに、直物とかいふことに、権大納言になりたまひて、右大将かけたまひつ。右の大殿左にておはしけるが、辞したまへるところなりけり。 よろこびに所どころ歩きたまひて、 ↑この宮にも参りたまへり。 ↑やがて参りたまへり。 大将殿も、よろこびにそへてうれしく思す。昨夜おはしましたりしかしこまりに、やがて、この御よろこびもうちそへて ↑立ちながら参りたまへり。

その月の二十日あまり		〈女二の宮裳着・薫との結婚〉 かくて、その月の二十日あまりにぞ、藤壺の宮の御裳着のことありて、またの日なん大将参りたまひける夜のことは忍びたるさまなり。（略） 三日の夜は、（略）そのほどのことどもは、私事のやうにぞありける。
三月二十日	〈宮の若君の五十日の盛大な祝い〉	（引用文は「宿木」⑤４７０～４７７）

ここでは、「正月晦日方」から三月二十日までに至る中君と薫の出来事が交互に記されている。「正月晦日方より、例ならぬさまになやみたまふを、（「宿木」⑤４７０）」と中君の陣痛の苦しみの中で、「二月の朔日ごろに（「宿木」⑤４７１）」、薫が権大納言兼右大将になった祝いが描かれ、次の朝、中君は男子を生む。「宮もいとかひありてうれしく思したり。大将殿も、よろこびにそへてうれしく思す。」と、匂宮も、薫もうれしく思っている。薫は、最初は「え参でたまはで」の状態だったが、「この宮にも参りたまへり。」「やがて参りたまへり。」「立ちながら参りたまへり。」というふうに、中君のいる二条院と六条院を往き来する存在として描かれている。

この誕生は多くの人々に祝福された誕生である。続いて「御産養」「五日の夜」「七日の夜」「九日」の祝いの時間が盛大に描かれている。その華やかな描写と同時並行する時間として、薫と女二の宮との結婚の記述がある。そして、「若君の五十日」の祝いが記されている。

この入り混じる二つの出来事は、薫が王権に取り込まれ、京で揺るぎない位置を占めるようになることと、中君が出産によって匂宮の夫人として定位したことの二つの光とそれに伴う影（描かれていないが）を示している。もはや、中君は、第一皇子の出産によって周縁界（境界）をさまよう人物ではなく、都の中軸に据えられる人物へと変遷していく。薫も、少しの彷徨はあるものの都の政治を動かしていく存在となり得ていく。

また、この描写は、登場人物の心の内面に深く入り込むことを避けた記述となっている。特に中君の内面描写は描かれていない。物語の基盤ともなる二つの出来事が、「正月晦日方」「二月の朔日ごろ」「御産養」「五日の夜」「七日の夜」「九日」「その月の二十日あまり」「三日の夜」「若君の五十日」と、明確に分かる日付を追い、日記的に出来事を並べることによって語るという方法をとって描かれている。なお、二条院と六条院の場面転換は、日付表現によるものと、薫の「参りたまへり」という移動によってなされている。この叙述は『宇津保物語』的でもある。若君の「御産養」「五日の夜」「七日の夜」「九日」「五十日」の時間描写は、心理描写の入り込む隙間もないほど具体的な祝いの品々にあふれて描かれている。[8] ここには来し方を思い、行く末を考える中君は描かれていない。現在の目の前に展開する事のみが記述される。

中君の出産の日付が、「正月晦日」より始まり、「その暁（二月の朔日）」に「男にて生まれたまへる」となぜ明記されているのであろうか。『源氏物語』正編における出産の場面と、比較して考えてみる。

【光源氏】　前の世にも御契りや深かりけん、世になくきよらなる玉の男皇子さへ生まれたまひぬ。（「桐壺」①18）

この御事の、十二月も過ぎにしが心もとなきに、この月はさりともと宮人も待ちきこえ、内裏にもさる御心まうけどもある、つれなくてたちぬ。御物の怪にやと世人も聞こえ騒ぐを、宮いとわびしう、このことにより身のいたづらになりぬべきことと思し嘆くに、御心地もいと苦しくてなやみたまふ。（略）二月十余日のほどに、男皇子生まれたまひぬれば、なごりなく内裏にも宮人も喜びきこえたまふ。

【冷泉帝】

（「紅葉賀」①324、325）

すこし御声も静まりたまへれば、隙おはするにやとて、宮の御湯持て寄せたまへるに、かき起こされたまひて、ほどなく生まれたまひぬ。（八月）（「葵」②41）

【夕霧】

【明石の姫君】十六日（三月）になむ、女にてたひらかにものしたまふ　（「澪標」②285）

【薫】

宮はこの暮つ方より、なやましうしたまひけるを、（略）夜一夜なやみ明かさせたまひて、日さし上がるほどに生まれたまひぬ。（正月）　（「柏木」④298）

まず、光源氏の出産は、「男皇子が生まれた」ことに着目し、しかも、その皇子が「世になくきよらなる」美しさであったことだけが書かれている。冷泉帝の出産は、出産予定日が遅れたことに重点をおいて、書かれている。夕霧の出産は、物の怪を描くために描かれた感もする。明石の姫君の誕生は、使いの伝言によって記されている。薫の出生は、その背後にある源氏の悩みの中で描かれている。以上、五人の出産の中で注目されるのは、冷泉帝の出産が「二月十

余日のほど」[9]と明石の姫君の誕生が十六日（三月）と日付が明記されていることである。いずれ二人は、天皇と中宮にそれぞれなるのであるが、それが予測される日付表現とも解釈できる。

なお、『うつほ物語』では、物語の展開の担い手たちとなる登場人物の出産日は明記されており[10]、東宮となった若宮も、「十月ついたちに、男宮生まれ給ひぬ。（「あて宮」３７０）」と、誕生の月日が記されている。

他の皇子の出産、梨壺の三の宮出産（「国譲上」６８９）やあて宮の二の宮出産（「あて宮」３７３）、四の宮出産（「国譲中」６９２）の日付は明記されていない。あて宮の第一皇子の出産日が明記されているのは、登場人物として重要になることの予告である。物語の中心になる人物の誕生は、明確な時間が付せられる傾向はある。梨壺の皇子出産の日付が書かれていないということは、この皇子は立坊しないことの伏線である。実は、東宮になることは、出生のその時から明確な月日表現によって約束されていたと解釈できる。

そして、物語には書かれていないが、いぬ宮がいずれ東宮妃として入内するであろうことも、「十月になりて、中の十日ばかりに、宮、気色ありて悩み給ふ。（「蔵開上」４７３）」と、その出産日の明記から窺われる。なお、『うつほ物語』の中軸を担う人物、仲忠と忠こその出産は、仲忠六月六日「玉光り輝く男（「俊蔭」３４）」、忠こそ五月五日、「玉光り輝きたる男（「忠こそ」１１１）」として描かれている。また、仲忠の子息、宮の君の出産日も、十月二十五日であることが分かる表現となっている。このことは、宮の君も以後の物語展開に関わる人物となることの予告と考えられる。

『源氏物語』や『うつほ物語』の出産の日付表現から、中君の出産した皇子は、次の物語の担い手になるかもしれない。謎解きの必然性のない中君の懐妊や出産の月日表現は、いずれ中君が国母となることを予測させる。不安だった中君の行く末の時間は都の論理の中に組み込まれ、存在感のあるものとなるであろう。国母となれば個人的な心を殺して生きねばならない。心理描写の入り組む隙のない出産の描かれ方は、それをも暗示している。

結びに

中君の明確に記されている日付表現は、結婚の日、引越の日、出産の日である。日付が明確に記されることは、中君の時間の中で、その日が際立っていることである。それは、以下の通りである。

①二十八日の彼岸のはてにて、（「総角」⑤２６２）〈結婚の日〉【八月二十八日】

②七日の月のさやかにさし出でたる（「早蕨」⑤３６３）〈引越の日〉【二月七日】

③正月晦日方より、例ならぬさまになやみたまふを、（「宿木」⑤４７０）【正月晦日】

二月の朔日ごろに（「宿木」⑤４７１）〈出産の日〉【二月朔日】

①は薫側からの日付表現であり、②は、中君を照らす月の出による日付表現である。③は、中君出産の日付表現である。宇治十帖では、明確に記される日付表現は、都側からのみに使われる。①の中君の結婚日は薫側から、すなわち都側から記され、②の引越日を境

として中君側から日付が明記されている。このことは、中君が引越日に住処を移動しただけではなく、都側の人となったことをも表している。①、②、③と明確な日付表現がなされているのは、その日が物語の分岐点をなしているからである。日付が物語の中に刻まれることによって、個人的な日付が社会的段階のものになっていくことを示している。中君の人生の展開が、その人個人のものではなく、社会的意味合いとして浮かび上がってくる時の表現である。中君は明確に表現された時間によって、「その日」を生涯にくっきりと切り取りながら、社会的な意味合いを持った日付へと反転させていったのである。

中君は宇治では大君と「もろともに」の時間を生きていた。都からの男の侵入によってその時間は脆くも崩れていく。姉大君の死後、その時間はなくなり、中君は二月七日、二条院へ移る。梅から桜の時間への転換があるかに見えたこの転居は、そうはなりえなかった。桜とともに中君は描かれることはなく、二条院の桜の女君には喩えられない空洞化が描かれている。桜という記号の空転がそこにはある。桜のモチーフを散りばめているが、桜とともには描かれない中君の不安定な位置づけがなされている。二条院の桜として外側から見られる中君と、決して桜に喩えられない中君は、二条院の桜を継ぐ存在にはなりえない。が、その中君は出産によって、正編の花に喩えられた女君たちの存在を超えていく。

人それぞれにその人に伴う時間があるが、その時間軸も場所や立場によって変遷していくのである。中君の宇治から都へと変遷していく時間は、彼女の生きた軌跡と共にある。

註

(1) 石阪晶子氏『源氏物語に於ける思惟と身体』（翰林書房）「第二章　大君物語の思惟と身体」に「直線的思考の大君」の指摘がある。二〇〇四年

(2) 高橋汐子氏は、「八の宮家をめぐる『つれづれ』―〈喪失〉・〈不在〉の物語として」の論文で「つれづれ」に言及している。フェリス女学院大学国文学会『玉藻第43号』二〇〇八年三月

(3) 『源氏物語』正編では、このような「もろともに」の言葉の使用例は、ほとんどない。ただ一例のみ、姫君誕生の明石の上からの手紙を源氏と紫の上が見る時に使われている。それは、次のようである。

御文ももろともに見て、心の中に、あはれ、かうこそ思ひの外にめでたき宿世はありけれ、うきものはわが身こそありけれ、と思ひつづけらるれど、（「澪標」②295）

(4) 大倉比呂志氏は「蜻蛉日記中巻の表現構造―鳴滝籠りをめぐって―」で鳴滝に赴く途次の描写に「もろともに」が二度も使われていることを指摘している。そして、「この上巻の『もろとも』なる状態を作者道綱母が詳細に叙述したことは、彼女にとってそれが絶対的時空として認識されていたことを物語っているのではないか。」と述べている。『国文学研究70号』30頁　一九八〇年

(5) 『源氏物語』から、七日の表現をみると、一月七日が一例、四月七日が一例、七月七日が五例、九月七日が一例となっている。一月七日、七月七日は節会の日、四月七日は、夕霧と雲居雁の結婚の日、九月七日は、野宮へ六条御息所を源氏が訪ねていった日である。四月七日の月は、「影ほのかなるに」、九月七日の月は「はなやかに」と形容されている。

(6) 河添房江『源氏物語表現史　喩と王権の位相』50頁　翰林書房　一九九一年

(7) ①「源氏物語作中人物論　中の君」（秋山虔編『別冊国文学13　源氏物語必携Ⅱ』学燈社、一九八二）、②「宿木巻幸い人中の君」

秋山虔他編『講座源氏物語の世界　第八集』有斐閣、一九八三）、③「幸い人中の君」（『源氏物語両義の糸―人物・表現をめぐって―』有精堂、一九九一）、④「幸い人の論理―中の君をめぐって―」（『季刊 iichiko』二三、一九九二・四）⑤「幸い人中の君」（『源氏物語の人物と表現―その両義的展開―』翰林書房、二〇〇三）、③は②を転載したもの。⑤は②を基本とし、④によって一部改稿したもの。

（8）『宇津保物語』には、随所に出産の後の産養の盛大な儀式が描かれている。

たとえば、『源氏物語』のこの祝いの品とあて宮の第一皇子の祝いの品で共通するものは、「碁手の銭、衝重、児の御衣、御襁褓、高坏、檜破子、御佩刀、沈、紫檀、銀、黄金」があげられる。

（9）筆者の論文「宇治十帖時間軸の論理」では、出産の日は、「二月十余日のほど」とおぼめかして表現しているので明確な月日表現には入れなかった。『フェリス女学院大学日文大学院紀要第15号』二〇〇八年三月

（10）筆者の修士論文附章第一節　明確に記された出産の月日―立坊争いの皇子たちの出産―参照

＊なお、引用文は、『源氏物語』は「日本古典文学全集『源氏物語』①～⑥（小学館）、『うつほ物語』は、「室城秀之『うつほ物語全』（おうふう）一九九五年」による。数字はページ数である。